

Trial & Error

トリアル・アンド・エラー

No.69

試行錯誤



かごめかごめもおほえたよ

特集 定住難民と日本社会

みんながハッピーになりたい ——日本語家庭教師の6年	2
日本語家庭教師プロジェクトはどうなる	8
数字に見る日本語家庭教師プロジェクト	9
●定住難民に聞く	
ラオス文化を捨てないと適応できないのか?	10
未来に希望が持てません	12
家族のためにがんばる	14
タイの仲間たち	15
在日外国人と私たち	16
バナニコム・キャンプの将来	20
My Dear Friend	22
ソマリアの日々 ③	23

みんながハッピーになりたい

——日本語家庭教師の6年——

日本語家庭教師プロジェクト

コーディネーター 森山久寿子

今、日本語家庭教師プロジェクトは転機を迎えている。「言葉は社会で生きていく上で必要なもの。難民が早く日本で自立できるよう、日本語を教えよう。相談事にもろう」そう思って少し気負い過ぎたようだ。すべてを引き受けてしまい、疲れ、自分のふがいなさに情なくなった。どうも変だ。もう1度このプロジェクトを見直して、どうしたら難民の人たちと自然につきあえるのか考えてみたい。

「それは片想いの始まりだった」

まだ学生だった私は、JVCにきたばかりの頃、海外へ行くことばかりを考えていた。そんな時、難民が日本にいる、しかも電車で2時間ぐらいの所に住んでいる、という事をJVCに時々手伝いにきている一人から聞いた。「難民」という言葉は、私の興味を引いた。

彼らに何かしてあげられるという発想は、私を何か正義の味方にしてしまうような甘い誘いの言葉だった。

そして初めて訪ねていった家族は、40歳前半のお母さんを筆頭に、5人の子供と長女のだんなさんと子供というカンボジアのチョアンさん（仮名）一家だった。言葉が通じないもどかしさはあったが、にこにこ迎え入れてくれた暖かさにホッとしたものだった。活動を始めたのが、秋の終わり、これから寒くなるという時だった。電車とバスを乗りついで人気のない道を雨に濡れながら、とぼとぼ歩いての家庭訪問が始まった。「人を助けてあげられる、ちょっと違う人たちとつきあえる、でもそんな自分の好奇心や欲求を満たすために、片道2時間もかけて通うなんてちょっと馬鹿げてる」。

そう思いながらも、チョアンさんの家に着くと、「よく来てくれました。寒かったですよ」。そう言って、暖かいお茶を出してもらおうと、今までのつらさがいっぺんに吹き飛んでしまうのだった。勉強を始めようと本を広げると、5人の子供たちがいっせ

いにテーブルに集まり、「私の宿題みて」「僕ね、プロレス好きなの」と私に話しかけ独占しようとする。

「順番にみるから」と一人一人、半ば叱りながら奮闘していると、何もできないまま1時間2時間たち夕食が始まる。「くすこさん、この辛い、食べられる？あんまりおいしくないけど、ごめんなさいね」。

狭いテーブルをみんなが囲む。一皿に盛ったおかずをつつきながら、自分の家にいる様な錯覚に陥る。「くすこさん、いつも同じ服だねえ。お金ないの？カンボジアでは、17~18歳くらいでみんな結婚するけど、くすこさん、結婚しないの？今日はもう遅いから、家に泊っていきましょよ」「あっ、私、一緒に寝たい」「僕も」「私も」家族の一人一人が私に優しい。その頃一人暮しだったので、この家にくることは、自分の家に帰省するような安堵感を覚えた。

彼女たちが、国境へ逃げてきた時、女ばかりの家族が兵士たちから狙われてどんなに危険だったか。そんな話を聞いても今の笑顔からは想像できない。しかし日本語はほとんどお手あげ。慣れない生活からくるストレスで、顔色もさえない。

どうして、彼女たちに会いたいと思い、悩みを共有しようと思い、雪の日も雨の日もせせせと通い続けたのか。草津の湯でも治りゃせぬという病にかかっていたにちがいない。

「こんな仕事やってられない」

チョアンさんの家へ通うのが、しんどくなってきた。チョアンさんはいつも背中が痛いと言う。病院に行く入院しろといわれるのだという。子供たちを放ったらかしにして入院することはできない。背中ではどんどん痛くなる。でも私には何もできない。つい2週間前には長女が熱を出して倒れたという。その時は隣の人が救急車を呼んでくれた。チョアンさん家族の一員のつもりだった私は、結局いろいろな問題が解決した後に話をきくことしかできなかった。



◀パーティはみんなの楽しみ
(左から3番目が筆者)

今までに200人近いボランティアが
▼ かかわり、去っていった



彼女たちに必要なのは近所の人たちなんだ、と感じた時、自分の役割がはっきりした。意気込んで活動を始めた自分の無力さと彼女たちが次から次へと起こす問題に、耐えきれなくなっていた。

もっと彼女たちの近くに住んでいる人を探そう。日本語の勉強のみに絞って活動し、後の生活の問題は近所の人に任せるようにしよう、そんな関係なら楽だ。そう割りきって新しいボランティアと交代した。

しかし、現実には、「隣近所の方は私たちの私生活まで覗く。日本人だって苦しい生活をしているのに、何でおまえたちの所にだけボランティアがくると言われる。会ってもあいさつをしてくれない。日本人が嫌だ」と電話が入る。世話になってる近所の人にきくと「町内会で決めた掃除当番を守らない。自分たちだって悪い所はあるじゃない」と言われる。

私が間に入っても、毎日近所に住んで顔を会わせているわけではないし、無責任なことではできない。近所の人には、「まあ、言葉や習慣が違って行き違ひもありますから、もう少し状況をみてやって下さい」と言い、チョアンさんたちには「判らない時は判るまで、相手にききなさい」と説明する。こんな調子で一年間くらいは、アッという間に過ぎてしまう。

他の家族はどうなのだろうか。次に関わった家族もカンボジア人だった。主人のサムロさんと奥さんのピラさん、そして3歳のロリーと生まれたばかりの男の子の4人家族。日本にきて6カ月目。主人のサムロさんは慣れない重労働の上シンナーを使う仕事なので、いつも気分が悪いともらしていた。病院に行く様に言うと、社長がなかなか許してくれない

と言った。

ぐずぐず押し問答を続けて、やっと病院に行った時は、肺に穴があいていると言われて、仕事を離れざるを得なかった。

そして半年後、新しい仕事と住まいをみつけたサムロさんの家へ行った。彼は給料明細をつき出し、「1カ月100時間も残業して、やっと20万円。どうしてこんなつらい事をしなきゃいけないのか。何とかしてくれ」と言って、目をうるませ、言葉は途切れてしまった。何も言い返せず、ましてやもっと頑張れなどということはとても言えなかった。

いったい、誰がこんな苦しい状況を生んだのだろう。どうして、私がそれと出会わなきゃいけないんだろう。彼らと縁を切りたい。もう知らない。手に負えない。こんな仕事、イヤだ。逃げ出したいのは私の方だった。

「プロジェクトを作ろう」

一番最初に、定住した難民の家に通っていたのはたったの2人。私がJVCへ足を運んだ頃は10数人になっていた。

「活動していて何が楽しいかって、勉強の後に食べるカンボジア料理だよ」と、よくみんなで話していた。どの家庭へ行っても庭先を広げている様な感じで、暖かく迎え入れてくれた。とても喜んでくれる顔を見ているとこちらの方まで嬉しくなる。

「これから、もっと多くの定住者から日本語の先生がほしいと言われるだろう。生活の相談もでてくるだろう。一人一家族が精一杯だから、ボランティアも増やさないとダメだ」という意見が出る様になった。

日本に定住して生活を始めようとする難民の人々は、政府の運営する定住促進センターで3カ月の日本語教育とさらに3カ月生活適応訓練を受ける。しかしそれだけでは不十分なので、センターを出てから現実の社会でどうやって生活していくかが大きな課題であった。

せっかく知りあった彼らの状況を何とかできないか、と関わったボランティア誰しもがそう思った。1人で解決しない問題も2人、3人と集まれば解決方法もでてくるだろう。人が集まってくれば社会的な責任や窓口も必要になる。何よりも情報整理や調査がもっと早くたくさんできる。

資金を集めてプロジェクトにしよう。何か新しいものを、誰からも命令されることなく自分たちの意志でつくりあげる楽しさと、私たちがやらなきゃ誰がやるという思い込みで、徹夜、徹夜の討論が始まった。

この時、中心になったメンバーは4人。ひとつの事を目指しながら、言いたいことが言える新しい友人たちが私にとってはエネルギーとなった。もちろん資金ゼロ、気力と体力だけが取り得だった。

「便り屋は何をしてきたか」

定住者から日本語家庭教師の注文が殺倒した。たどたどしい日本語で電話が入ってくる。「日本語の勉強をしたいです」「今、どこに住んでいますか?」「えー、ここわかんない」なんていう会話はしょっちゅうである。必死で聞き出す。相手も一生懸命である。人が頑張っている姿は、心を揺さぶられる。

電話で聞いた住所をもとに家庭を訪ねていく。場所の確認と、家庭の雰囲気、構成、必要なのは日本語か生活相談か、みきわめて調査カードに記入していく。ボランティア希望者のファイルをめくって、できるだけ近所の人を探す。ボランティアを定住者の家へ連れて行き御対面となる。この間の期間は早くて2週間、平均して1カ月。そう急いでボランティアを入れなくても自分たちで何とかやっていけると思われる家族は、半年以上待たされる。

次にかかってくる電話は以下の通りである。

「私は何回も、先生をお願いしたのでどうして探してくれないの。私のこと、どうでもいいんでしょ」顔を会わせると、「どうして先生連れてこないの、僕だって日本語できないよ、問題だっていっぱいある。森山さん、先生探すって言ったじゃない、それは嘘つきよ」と突っかかってくる。

「あなた、そんなに日本語ができるんだったら、先生いらないし、他にもっと大変な人があるんだから。自分の事ばかり言ってないで、あなたこそ、他の人に日本語を教えてあげればいいじゃない」とやり返す。

よくあるパターンである。どっちも正しいと思って譲らない。だが待てよ、私がやってきたことは、安くて便利なボランティアを、定住者の注文にあわせて配達することなのか? 定住者が、ボランティアをそんなふうに見てるなら、なぜそうなったんだろう。

ボランティアから電話がかかってくる。「どうも私の行ってる家族の人は、私のことが気にいらぬみたい。私だって、時間をさいて一生懸命やってるんですよ、失礼ですよ」

あれあれ、こんなはずじゃない。よっぽど相性が悪かったのかと思う。

定住者の家に行く、日本語を教える。そうすると今まで何気なく使っていた日本語のおもしろさがわかる。

生活相談にのる。生活保護、就学、住居探し、役所に行くといふ今まで知らなかった事にぶつかる。へえ世の中ってこうなってるの、と改めて自分の住んでる社会のことがわかる。

勉強が終って、夕食が出される。彼らのつくる手料理はおいしい。それがめあてで遊びに行ったりする。こうなってくると、定住者と出会っていい思いをしているのは、こっちの方じゃないかと思えてくる。「ボランティアやってます」という看板を掲げて彼らの家に行き、「助けてあげよう」というおこがましい態度でいると、相手から見すかされる。

おっ、これは便利なものがある。使わない手はないというのが人間の心理である。片やボランティアをやる側は、自分より弱い者に共鳴してしまうという人の良さで、ついつい相手に思い入れをしてしまう。「こんなにしてあげてるのに、どうしてわかってくれないの」となる。

もうそうなる狐と狸のだましあいと全く同じで美談が一挙に醜聞になってしまう。

「淋しいのはおまえだけじゃない」

最近、イランとかアフガニスタンとか、果てはウガンダまで多様な国の人が事務所を訪ねてくる。インドシナの人と違うのは、みんなピリピリしている

ことである。強制送還されるのではないかと心配しているからである。国から逃げてきて、追われる身、大使館の側など寄れない、と真剣な表情で訴える。その中のホセイ(28才)は、年の割にはちょっとふけている。「仕事は友人の紹介で何とかあった。でも日本語ができなくて困ります。誰か紹介して下さい」。ボランティアを探して、半年くらい勉強すると、次に「いいお嫁さんがいないか」。

日本で落ち着いた平和な暮らしをしたい、話し相手もほしい、食べさせることもできる、と次々に自分の状況を述べる。「それは、あなた自身の問題だし、自分で探すしかないでしょう」というのが、一番簡単な答。

ただ、彼が日本人であればのはなしである。

アフリカで飢えた人たちがたくさんいる。インドシナ難民が国境でバタバタ倒れた。という報道があると、皆募金をし、何とか助かれれば良いのにと願う。ところが、その難民が、明日から隣に住みます、となると、「危ないんじゃないか」、「汚ないよ」という拒否反応が返ってくる。ましてや、身内の結婚相手などになるものなら勘当である、なんていうのが、極々、普通の反応である。

年頃の定住者の一番の悩みは、結婚である。一番の壁になるのは、彼らが難民で、東南アジアからきた人ということである。それだけの事である。

ボランティアとして関わる一人一人も常に問われる。一方的に週に2時間だけ、日本語を教えているうちはいい。彼らが、自分の家に入ってきた時、どんな顔をして迎えたらいいか。異なった者が入っ



大和の料理教室で

てくることに対する拒否反応でつい身構えてしまう。

現実に独身者は多く、日本の生活に慣れ、安定してくればくるほど、一人暮らしは身にしみてくるのだ。

「片想い教室」

定住者は、ほとんどが中小企業につとめている。企業が集まっている所や、友人がいた方がいいとい

って、仲間がたくさんいる地区へ引っ越してくる。そうになると、まとまって日本語の勉強をした方がお互い励みとなって効率がよい。ボランティアがくるのを受け身で待つのではなく、自分で出かけていって勉強する方がいいだろう。

定住者が一番楽しいと思うこと、音楽、料理、民族舞踊、等を発揮できる場もほしい。生活相談も専門家に手伝ってもらって、定期的にできればいい。などなどとアイデアが集まって、神奈川県大和市にある大和市勤労福祉会館に大和教室が開設された。

週に2回、日曜日と木曜日の夜というペースで日本語の勉強を中心にプログラムが組まれた。定住者と日本人が一緒になって作りだす教室は、日本人が日本語を教える“便利屋さん”になってから、教える側と教えられる側になってしまった。

定住者にとって日本語は必要はことであり、生活に響いてくる。しかし、便利屋さんにも心の相談はしない。結局、1年くらいは大和教室に通うが、ある程度勉強したら離れていく。

例えば、土曜日の晩、会社でイヤな思いをして泣いたとしても、日曜日は気分を切りかえて、教室へやってくる。私たちが彼らの問題をとらえようとする時、私たちが相手に入りこまなければ何も出てこない。定住者は、教室で日本語の勉強を終えた後、さっさと帰ってしまう。民族の交流など、年に数回あるパーティやお料理教室だけである。たまに机を並べて、「あなたの問題は何ですか」などときいても答えるわけがない。自分が相手の立場だったらどうかということである。

便利な日本語教室があれば利用するのは当り前の話である。こちらには、いろいろ想いがあるが伝わらない、片想いと同じ。

教室という空間、先生と生徒などという役割を演じる前に、お互いに一人の生身の人間であることを忘れていく。

「ほしいものはなあに？」

どうして自分の生まれ育った村や町、共に生活し

てきた家族や友人を切り離して、難民として逃げるのか、と定住者にきくと、「食べる物もなかなか手に入りにくくて、生活が苦しいから」「共産主義が嫌だから」と言う。そんなに食べる物が無いのか？ 共産主義って何だ？ と聞き返すと、「ボル・ポトの時は毎日、お茶碗一杯のおかゆだった」「財産を全部持っていかれて、ちょっと考えの違うことを言うとか変な所に連れていかれた」と答える。

「そんな国じゃあ、帰りたくないだろう」

「昔の様に食べ物も自由にとれて、楽しく暮らせて戦争がなければ、すぐにでも帰りたい。でも、そのうち戻れるだろう。それまで日本で金貯めて、勉強して、自分の国へ帰ったら、それを生かしてもっと良い国にするんだ」と言う。日本人から、いじめられても多少のことではへこたれない、そんな意気がうかがえる。

彼ら、定住者がほしいものは何だろう。

やはり、国へ帰ることだろう。でも日本で生まれ育った子供たちには、そんな実感はない。子供たちにとってインドシナは外国だ。

次に定住者がほしいものは何だろう。

電気製品であり、貯金であり、子供が教育をうけることであり、そして友人だろう。

日本語を使えるようになることは人によって違う。年をとった人や外へ出る必要のない主婦には、日本語ができなくてもやっていけるという感じがある。

毎日のスーパーでの買い物に会話は不必要だからである。病気になったり、役所からの書類がきたりさみしくなったりした時は、家族の者や同じ民族の友人が、助けてくれる。

何かあった時は人に頼れば良いという発想に、「甘えてるんじゃないか、いざという時、一人の時はどうするの」と勝手な心配が働く。でも、と思う。ある程度の日本語は必要かもしれないが、困った時、助けてもらうのに悪い気はしない、助けた方も役に立てて嬉しい。各々が、自分の得意な分野で、力を発揮できることは、すばらしいことだ。これが、一方が助けっぱなし、助けられっぱなしでは、いびつな関係になってしまう。

私たちが、定住者に自立してほしいと思う時、全て何もかも自分でできるようにと考えてしまいがちだ。私たち自身が、人と人の間で、もちつもたれつハッピーな関係をつくりたいと思う。自立していくためには、お互いハッピーになるためにどうしたらいいかを、実践していくことだろう。

「ラブ・コールは時々がいい」

「もしもし、また問題だよー、大変なんだから」と電話のむこうの声。「黄だんが出たんだよ、仕事も首になったし、どうしたらいい」「子供はどうしてるの？」「子供は元気に学校行ってるけど」

今から、彼の家まで行ったら2時間半。とてもじゃないけどつきあえない。「近所のボランティアを紹介したでしょ、彼に相談したの？」「まだ」「とにかく福祉事務所に行って、相談して生活保護をうける様にしないと病院にも行けないよ。一人で行けなかったら、ボランティアに連絡して一緒に行ってもらえばいいよ」「あー、そうか、ありがとう、じゃあやってみよ」ガチャン。

ラオスのコンさんであった。もう5年も日本にいるのに、困った時、すぐ電話してくる。大した用事がない時も「たまには、酒でも飲もうよ」とかかってくる。今まで、日本語をいかにうまく話すかというテキストを使って、ボランティアが関わってきた。

でも、現実には、病院に行った時、再就職する時、役所で手続きをする時に使う言葉が必要だし、言葉ができない時は、代わりにやってくれる人が必要である。定住者もどこで何をきけば、物事がうまく運ぶかわかっていけば、わざわざ、私の所まで電話をする必要はない。私の身体もひとつしかないから、全ての電話に対応できない。最初は、つきあっていったが物理的に精神的に、大変な負担になってきた。

定住者の相談に答えられる人が一人でも増えれば、各々、楽になる。専門家にも大いに手伝ってもらおう。問題が入ってきた時に対応できるシステムがあればと思う。

ただし定住者にしても、人間関係のできていないボランティアや専門家においてそれとプライバシーを話すはずがない。システムだけあっても、機能しない。専門家も免許をもっただけでは専門家ではない。人と関わることで専門家になっていく。

同時に、定住者が、行政のシステムなどをどう使っていくか、身につけていくことが、重要になってくる。「今度の日曜日、みんなでハイキング行こうよ」という様な電話ばかり入ってくる日が待ち遠しい。

「便利屋さんもうやめよう」

ボランティアというのは、自ら志願して物事に関わることを意味する。定住者のことを新聞で、テレビで知って心動かし、彼らの問題に関わろうとする。何ができますか？役に立てないでしょうか？そ

ボランティアの声

「この4月から主婦と仕事の2足のわらじをはくことになり、3足目は無理ということ、JVCのボランティアをやめさせてもらうことになりました。私がこの活動を通じて“めぐりあった”という感じがしたのは何といっても定住者の家庭です。彼らの結束の強さ、暖かく笑い声に満ちた団らんを目のあたりにして、私は何か置き去りにしてきたものを思いおこされたような気がしました。戦後、西欧流の個人主義が良しとされて、“家族主義”はまるで悪い物のようにさえ考えられてきましたが、その一家を見て、家族というのは本来無条件に愛しい、強いきずなで結ばれたものなのだと反省させられました」

「私のボランティア活動は週に1回も会いに行くことがままならず、隔週というのが現状です。そこで私は教科書を離れ、一友人として野外活動をとともに楽しんでいると、海、山、公園等へでかけることを実行しています。彼らが平均的日本人同様に生活を楽しめるよう、自由にどこへでも行けるようその手助けをしたいと考えています」

「僕たちのグループが大きくなるにつれ、僕たちは顔を知らない者同士になってしまった。でもせっかく同じボランティアの仲間なのだから、知らない者同士というのはあんまり寂しい。この『そんぽっと』の発行部数は活動者に関係諸団体の数を加えると100近くになる。これだけ多いと切手貼りやはんこ押しも1～2分では終わらない。この『そんぽっと』は皆が作るもの、皆が自分

自身を確かめあう場なのだ。いつの間にやら“読み手”になってしまっている。僕もその一人だった。」

「日本語家庭教師をしようと思った動機は、日本社会に埋没していると窒息しそうな気がしたからです。この活動が現在まかり通っている、安上がり福祉政策における、ボランティア育成論を促進するようなものにならないことを祈るばかりです」

「1月から始めた新小岩の夜のお勉強も、つい先日終わってしまいました。カンボジア人のお父さんの就職先とのトラブルが原因で引越してしまったのです。最初はとても恵まれているように見えた家族なのですが……。つくづく難民問題の難しさ、自分の無力さを感じています」

「活動を約1年休んだあと、先日久しぶりにカンボジアの人たちに会いました。気のせいかもしれませんが、日本での生活の慣れとともに、さまざまな問題の中に投げこまれている大変さも自覚するようになったみたい。なかでも週1回私が顔を出していたところに比べて、それぞれに自発性がより出てきたように感じました。これは反対に言えば、私たち活動者は彼ら自身が問題の解決に取り組み、自発的に動き出すまで待つべきことがある、ということかもしれません。彼らがそれで失敗を体験するとしても、です。日本人を何年もやっている、日本を彼らよりは知っているため、つい早々とボランティアが問題にあたり、彼らの自立能力を弱めてしまう結果になることもあります。ときどき定住者と離れてみることも必要だと痛感しました」

日本語家庭教師プロジェクト機関誌『そんぽっと』より

う言って問いあわせがくる。

「彼らと友だちになって下さい」「えっ、そんなことでいいんですか?」「そう、ただし、友だちになるには条件がいります。彼らに恋をしてしまったと想定します。何とかして気に入られようとするでしょう。だけど無理してほめたり、助けたり、いいかっこして見栄をはると、疲れるし、長続きしません。相手はそんなのよくみえてるから、馬鹿にしてくるし、うまくまとまる話もまとまりません。肩の力をぬいて、一緒に悩んだり、笑ったり、怒ったりしていけばどっちも気楽で長続きします。以外な面もみえるし、もっとうまくいくでしょう」と恋占いでもする様に説明する。

ボランティアというイメージは、清く貧しく美しくという言葉でイメージするくらい、きれいなものである。だけどやってる人間は、とってもそんなふうにはいなくて、七転八倒している。それだった

ら、いっそのこと、ボランティアなんていう名前はやめよう。別の名前を名乗って、顔のみえる関係にしたい。

定住者にとって、便利屋さんになるのはやめよう。プロジェクトの名前もちょっとおかしい。教師なんて立場じゃなくて、隣のおじさん、おばさん、お兄さん、お姉さん、花子ちゃん、太郎さんになりたい。日本語だけじゃなくて、料理のこと、洋服のこと、学校のこと、子供のこと、病気のこと、会社のこと、幅広く関わっている。どれも関連しあっている。ひとつだけ、とりだすことはできない。もうちょっと人間くさくなりたいね、お互い。

長い長い時間の中で、私たちが定住者も生きていく。あせらず、気長に、ひとつずつ確実にお互い近づいていきたい。時には失敗しながら、時には肩たたいてギャハハと笑いながら。

日本語家庭教師プロジェクトはこうなる———今後の方針

森 山 久寿子

従来の活動の目的は2つあった。①定住難民が地域に根ざし、経済的、精神的に自立していくことを目指す。具体的には言葉の障害によるコミュニケーションギャップを埋めていく。②定住難民を受け入れている地域の人々の理解、協力を得る中で難民問題を考えていく機会を設け、市民レベルの啓蒙をはかる、である。

定住難民自身が抱える問題もさることながら、彼らを受け入れる周囲の問題も重大であると考えた。四年間の活動は、定住難民に対しても日本人に対しても働きかけようとするものだった。この間200人近い人々が活動に加わり、去っていった。定住難民と関わった身近な人たちの中で、何が変わっていったのだろうか。定住難民は、本当に力がついたらどうか。

個人的な感想を述べさせてもらえば、定住難民は自分自身で失敗を繰り返す中で力をつけてきたし、日本人の活動者は、そんな彼らと関わることで、社会の問題や人間のいろいろな面を勉強した。活動の視点も単なる“お助けマン”から、共に生きる相手としてみていけるようになった。

ただ残念なのは、定住難民と関わることの意味、

なぜ彼らが難民になってしまったのかということと、在日外国人はなぜ、日本国籍をもつものと同等に社会参加できないのかという問題に、正面から向き合うという視点に欠けていたことだ。

各々に言い分はあるだろうが、明確なプランを出せなかったことは、私たち自身の認識の甘さによる。

そこで今までのように抽象的な目的ではなく、具体的な活動の到達点が目的になる様、プログラムを変えたい。

定住難民に関わることで、何をめざすのか、その到達目標として日本語会話が上達する、新聞が読めるようになる、一人で役所や病院へ行けるようになる等、いろいろあるだろう。具体的なプランをやっていく中で、出てくる問題点をひとつずつ書きとめ、次への展開へ生かしていける様、活動をしている一人一人が問われることになる。

またJVCに関わる人、関わらない人、日本語のプロジェクトだけに関わる人など様々な立場の人がいて、そのまとめをスタッフが一人で抱えていたという状況もあった。定住難民と関わる意味を一人一人が考え、行動できるようなプランを立てたい。

そのたたき台として、今年度の案を出した。

〔原案〕

<活動の目的>

定住難民が現状よりも生活の諸問題に対処できるようになること

<対象地域>

神奈川／埼玉／東京

<対象者数>

1家族2～3人として50～60人

<内容>

④定住1～2年目の定住難民に対して

週1回の訪問を1年間続ける。日本語を教えるだけでなく、料理の得意な人、買い物の好きな人など、各々の持ち味を生かして定住難民がいろいろ相談できるような関係作りをする。

⑤定住3年目の定住難民に対して

週1回の訪問を1年間続ける。生活相談の手引きなどを使って、実生活に役立つ方法を身につける。

⑥定住5年目の定住難民に対して

相談事には専門家を紹介し、難民の人たちといっしょにパーティを企画するなどの関係づくりをする。

⑦子供たちについて

週1回の訪問を1年間続ける。日々の宿題に時間を取られることも多いが、基礎学力をつけるように参考書などを活用する。

<活動方針>

- ④～⑦に関して、活動者と定住難民が相談して1年間のプログラムを立てる。一定の到達点に達するように一年毎に相互評価する。
- 活動希望者は動機作文(400字×3枚)を書き、活動終了時には各々が評価を行い、問題点や活動に関わる姿勢を共有する。
- 地区別ミーティング、専門家とのミーティング、

他団体とのミーティングを行う。個々の活動には限界があるので、横への広がりを持つことで問題解決をスムーズに行う。

- 活動者の募集は4月に一斉に行い、人の入れ替えによるトラブルをなくす。
- 1カ年(4月～翌3月)に、難民の歴史、現状の問題、方針などのオリエンテーションを行い、各々の視点を明確にする。
- 連絡係を設置する。地区別に窓口を設けることで情報処理、問題解決を潤滑にする。

- 機関誌を作成、発行する。ミーティングだけでは補えない情報の交換、全体の動きなどを互いに知らせる。
- 資金集めをする。このプロジェクトを遂行するためのスタッフの生活費、機関誌印刷代、連絡、交通費が必要になる。
- 現状調査をする。8月をめどに終了する。
- 活動者、専門家の名簿をつくる。
- 今までの活動報告書の編集。

(新プロジェクトについては『そんぼと』の次号で詳しくお知らせします)

数字に見る日本語家庭教師プロジェクト (1982.10～1987.3)

- 今までに何人のボランティアがかかわったのか——180人
- 今まで何人の難民の人々が日本語を学んだのか——198人
- 日本語を学んだ難民はどこから来たのか

国名	人数
カンブチア(カンボジア)	106
ベトナム	45
ラオス	30
イラン	7
ウガンダ	2
チリ、フィリピン、ガーナ、アフガニスタン	各1
不明	4
合計	198

- ボランティアの平均年齢
男性 27.9歳
女性 25.1歳
- ボランティアの活動期間
1番長い人——5年(1人)
1番短い人——1カ月(3人)
平均——1年

- 今までの活動地域 (1982.10～1987.3)

都道府県	家族数
神奈川	109
東京	45
埼玉	19
千葉	2
その他	2
合計	177

- 現在の活動地域 (1987.3.31現在)

都道府県	家族数
神奈川	39
東京	6
埼玉	6
合計	51

(注) 1家族に2人以上の難民が日本語を学ぶ場合もあるので、家族数より難民数が多くなります。

ラオス文化を捨てないと適応できないのか？

シンカム・レックさんの場合

残業に追われ、忙しく働くレックさん

日本語家庭教師担当のMさんに紹介された、レックさんとはなかなか会えなかった。毎日、残業があるらしく、帰宅は10時以後。私の午後10時といえば、酒が入っていることが多く、電話しなくてはと気がつくといつと11時過ぎで、翌朝のことを考えると、電話を控えてしまう。

ようやく電話連絡がとれたと思うと、勤務の関係で、土曜日の夜か日曜日でない、レックさんがいう。個人的な都合で日曜日はまるでだめな私のあいてる土曜日は少なく、約束の日はかなり先になった(編集のMさん、原稿遅れてゴメンナサイ)。

約束の土曜日の夜、私たちは小田急線の長後の駅(藤沢から5つめ)であった。すぐ前の喫茶店に入って自己紹介のときに、レックさんは名刺をくれた。シンカム・レックとカタカナで書かれた名前の上には、主任という肩書きがついていた。あとで聞いたことだが、レックさんの月収は30万円余(残業・税金こみ)。40歳という年を考えれば、日本人の平均とくらべれば、決して悪くはないだろう。一流企業の下、三流企業の上、というところか…。

難民としては順調とっていいレックさんは、これまで在日同胞のことに気を配ってきた。彼らの相談相手になるだけでなく、外に向けては難民の困難を代弁してきた。そして今また、一家4人を殺したカンボジア難民、「ブイ・ムンさんを見守る会」の中心メンバーにもなっている。日本における定住難民と問題について、同じ難民に対する忠告を含めて率直に話してもらった。

3割安い労働力と見られた難民たち

レックさんの在日生活が、順調にいった最大の理由は、すぐれた日本語能力にある。1945年、ラオスに生まれたレックさんは、日本で言えば工業短大の機械専門課程を卒業し、1965年には政府派遣の技術研修生として来日している。わずか半年たらずの日本研修がレックさんの運命を大きく支配していく。

帰国したレックさんは、やがて政府間援助で、ラオス国内で工事をする企業の通訳を勤めた。ダム工事、水道工事、大使館工事…、仕事は順調に続いた。

勤勉なレックさんは、昼間通訳の仕事をしなが、夜は日本語学校に通い、さらに日本語の勉強を続けた。通訳のあとは、日系の貿易会社に勤めた。

内戦、ベトナム軍の進攻などで、ラオスでの将来に絶望したレックさんが、妻(26歳=年齢はいずれも当時)、長女(6歳)、長男(2歳)の3人を連れ、ノンカイの難民キャンプに入ったのは、1979年。

日本政府が、来日を希望する難民に対して、出している条件は次の4つだった。①日本に親類がいる、②滞日経験がある、③日本に身元引受け人がいる、④日本語が話せる。多くの来日希望者のなかで、そのひとつでも満たしている人は少ない。それでも何人かは来日が許可される人があるなか、①を除く②、③、④を満足するレックさんの来日がスムーズにいったのは、当然のことであろう。

来日は79年12月28日。半年間の姫路の定住促進センターでの生活後、身元引受け人になってくれたS氏が見つけてくれたT工業に就職。S氏は、いまでもレックさんの相談相手になってくれる善意の人だが、T工業は、あまりいい会社ではなかったらしい。

当時、神奈川県綾瀬の工業団地の指導的地位にあったT社は、自らも積極的に難民を受け入れるだけでなく、団地内の各社にも強くすすめていた。その理由は、どうやら、安い労働力の確保であったらしい。レックさんは、

「かげで、難民用の統一給与表を作っていたのですよ」と、数字がビッシリならんだコピーを見せてくれた。それは若年層から高齢者層までの給与関係の数字のならぶ一覧表で、いかにも秘密の給与表に見えた。一中小企業のものとしては、あまりに網羅的にすぎる……。

ちなみに32歳のレックさんの給与は本給100,000円、諸手当16,000円、残業手当で26,100円(36時間分)。1日実働8時間の機械製造工としては、相場3~4割安というところだろうか。一時30人も勤めた難民も結局、一人残らずやめてしまったという。「ぼくが、一番最初に勤めて、一番最後までいたよ」とレックさんが笑いながというT工業は、レックさんの退社後、半年あまりして、60年末には倒産してしまった。その最後は夜逃げ同然だったとか…。

日本語や日本の習慣に慣れるのはやはり大変

「難民にとって、一番の問題は、やはり言葉の問題です」

と、難民のスポークスマンの顔に戻ったレックさんという。数回話したという講演のメモだろうか、整然と文字の並んだノートを持参している。その話をまとめておこう。

まず定住促進センター。

①住居が狭い。家族4人で8畳1間に住んでいたときに、独身者2人の同居を求められたことがあるとか…。

②日本語の勉強期間が短い。「ぼくは困らなかったけれど…、就職してから聞く、“メシ、行こ”“持ってこい”なんか、習わないから…」とレックさん。

③日本の社会の規則を教えてほしい。「壁をとりはらったり、間仕切りをしたり、ラオスでは改造するのは、部屋を借りた人の自由なんです…」そのほか、月給などの額面と手取りの差、自治会活動などについて、説明が不足しているとか。

④自由になる金が少ない。1家4人で自由になる金は月2万円。そのなかから、酒、タバコなどの嗜好品、子どもの洋服などを買うのは大変だ（8年前のレックさんの水準）。

⑤通訳が少ない。インドシナ難民といっても、ラオス、ベトナム、カンブチアと3国。細かいところまで意志疎通ができる通訳がほしい。

⑥センターで探した“就職口”に固執しがち。「とにかく行きなさい、もう少し頑張りなさい」が多い。仕事を探してくるのが大変なのはわかるけれど…。

会社に就職して…。

①言葉が分からない。

②差別がある。

③日本人の気持ちが分からない。「注意されているのが、怒られているような気がする」普通の声で、ゆっくり、繰り返して話してほしい、とのこと。人間関係に疲れて辞めていく難民も多い。

④習慣が違う。難民が一生懸命働きすぎて、周囲の日本人の能率を上回り、トラブルが起きるケースも少なくないとか…。

⑤ボランティアしか頼る人がいない。公的機関、つまりセンターなどでもっと親密に相談にのってほしい。

同胞を弁護する心と叱責する心と

喫茶店の閉店時間になり、近くの安酒場に席を移して、話を続ける。車を運転するレックさんはジュースを飲むだけで、肴にもハシをつけない。しばらく雑談をするうちに、ラオス難民のなかのリーダーとしての発言が出てくる。

「小学校の初めから、日本にきている子どもは問題ないですね。私の子どもも、まあ順調です」

長女も1年おくれながら、1年生から日本の小学校に通ったという。

「でも、言葉がね…。母親は日本語をあまり覚えられないから、ケンカなんかすると、子どもは日本語で、母親はラオス語でおたがい一方的に話すことも…」

「娘はラオスには帰りたいくないし、ラオスのことなんか知りたくない、というんですよ。息子のほうはラオスのことに興味を持っていますが…」

「ラオスで、大きくなった人は、日本に慣れるのは難かしいですね。ラオスでは、誰かが助けてくれるから、みんなノンビリ。日本人みたいに一生懸命働かないね」

「私、最近、友だちから電話がかかってきたらいう。相談するのなら来てもいい、でも、酒、飲むのならダメって。みんな、もっと頑張って勉強してほしい、日本語、日本のこと。ラオスなら、年をとったら、子どもたちが面倒見てくれる、でも、日本で大きくなった子どもたちは、たぶん、見てくれない。だから、お金もためなきゃだめだ…」

ラオスにいたときから、“日本的”に努力してきたレックさん。いつまでも、祖国にいたときのままのノンビリした生活態度が、はがゆいらしい。中学校を卒業し、進学せずに就職して、車を乗り回し、ラジカセを鳴らす若い人に話が及んだときに、複雑な顔をしていう。

「ラオスでは、学校を卒業して結婚するくらいまでの若い間、みんな遊んでいる。お兄さん、お姉さん、オジさん、オバさん、食べさせてくれる。でも…」

仲間をかばおうとする言葉のあとに、もっと頑張してほしいという叱責の心が顔を出した。

在日ラオス人会の活動もしているというレックさん。

「(中華街みたいな)ラオス人街も作ればいいんだけど、土地が高いし…。土地の安いところは、就職口がないし…」

困難はあっても頑張る、とレックさんの顔に書いてある。

(A・G)

未来に希望が持てません

リー・ソクトンさんの場合

とにかく時間がない

高田馬場の駅から歩いて3分ぐらいのところ、レストラン「カンボジア」を経営しているリー・ソクトンさんに定住難民の生活状態について話をしてもらった。

リー・ソクトンさんには、父、母、それに兄弟が7人いるが、まだ独身である。リー・ソクトンさんは1973年、カンボジアから日本に勉強に来て、台湾を観光旅行している間に戦争が起こり、難民（正確には、Displaced person「流民」）となった。

今でこそ30人程度が入れるくらいのレストランを経営しているが、それ以前は、飲食店で働いたり、喫茶店のカウンターのアパートを3年やったり、中華料理のコックも経験している。「私は外人なので、大学をでたとしても、会社でやっていくのは難しい。だから体で身につけたものしかできません」と言い、続けて「日本では大きな商売はできないと思う」とも言った。

リー・ソクトンさんの住まいは足立区にある。職場まで往復2時間はかかる。夜、仕事が終わって家に着くのは深夜1時ごろで、それからお風呂にはいって少し休み、寝床につくのは2時をまわっている。そして朝の6時、7時には起きて職場へ向かう。

2月に起こったカンボジア難民殺害事件の悲劇でもわかるように、日本語という言葉の壁が難民の前に立ちちはだかっている。リー・ソクトンさんの場合は、四ツ谷の日米会話学院で日本語を学び、他の家族はJVCの日本語家庭教師などにお世話になった。この日本語によるインタビューでも、かなりわかりやすい日本語で話してくれたが、やはり「日本語は難しい」と言い、「レストランで注文をとったり、電話で予約を受けたりするぐらいの、簡単なことはわかるが、日本の文化、歴史なんかについては難しい」と答えた。

また「日本語を勉強する時間がない」というのは、先ほど述べたことでもわかることだが、忙しいということに加えて、JVCの日本語家庭教師から教わるのは1週間に2回で、1回が1時間半から2時間ぐらいでは短いとも言う。リー・ソクトンさんの一番下の弟は21歳で、日本に来て4年たつが、会社

など周りの人が日本人なので、日本語を覚えるのも早いようである。しかし家の中で家族で話す時はカンボジア語だそうだ。

日本人の友だちがない

リー・ソクトンさんは31歳で、そろそろ結婚を考えてもいい年だ。「結婚は自分だけでは決められないが、日本の女性と結婚したいと思っても、自由な時間があまりないので、つきあう機会もない」と言っている。「愛があれば、国籍は問わない？」と問うと、彼も深くうなずいた。

足立区の家での近所とのつきあいについて尋ねると、朝の挨拶や、「元気ですか」などと声をかけることはあるが、アパートの隣近所の人とはそれ以上話すことはないと言う。

「日本の習慣とカンボジアの習慣は異なります。カンボジアでは、知り合いや友人と会うと挨拶だけでなく、その人を家に迎えてお茶を飲んだり、酒を飲んだりしますが、日本の場合は挨拶だけです。そういう習慣がないのはアジアでは日本ぐらいじゃないですか」と現在の日本社会がかかえる問題をつくような言葉だ。このような日本の社会において、「友人」と呼べる人はどのくらいいるのだろうか。「はっきりと覚えてはいないけど、かなりいます」と言うので幾分ホッとしたが、話を続けていくうちにそれらのほとんどが難民であったり、リー・ソクトンさんが中国系である関係から華僑であることがわかった。だから困ったとき、例えば、リー・ソクトンさんが1人で暮らしていたときや、職を失っていたときはそれらの友人に世話になったそうだ。

だが、日本で商売したり、アパートを借りるには、どうしても日本人の保証人が必要になってくる。そのときは、日本人のある程度年輩の人を頼りにしている。同じ世代の日本人とのつきあいはなく、「遊ぶときもやはり同じカンボジア人とかになっちゃいます」と言う。

現在の日本社会は、日本人だけ考えてみてもさまざまな問題がある。外国人となれば、それは日本人以上であるのは明らかだ。そこで「日本社会のどういところが問題だと思うか」と質問したところ、

具体的な答えは得られなかった。ただ「日本では大きな希望は持てないと思います。大きい商売なんか絶対できないと思います。外国人だから。たとえば、日本国籍をとってもそれはできないと思います」との返事が返ってきた。

日本の難民受け入れ条件は、アメリカ、カナダと比べて厳しい。リー・ソクトンさんも、友人がアメリカなどにいるので、そのことがよく分かるようだ。「アメリカでは何年か住めば、市民権を得られるけれど、日本は何年住んでもどうなるかわからない。何年たっても日本の国民とは違うでしょ」日本にいて一番困ることは「将来だけです」と答える。リー・ソクトンさんの両親は、すでに年老いているので、彼らだけでは生活できない。助けることができるのは、自分たち兄弟だけ。「アメリカなどでは政府がなんとかしてくれるでしょ」。

難民と中国残留孤児とは違う

このインタビューをしたころ、中国残留日本人孤児が来日していたので、話題をそれに移してみた。

「中国のケースと私たちのケースとはちょっと違うと思います。半分、いえ70%ぐらい違います。中国のケースは国が厳しいわけではない。生活してい

けるのだから。日本に来て、何十年も別れ別れになっていた親せきや父や母に会いたいだけ」。

「中国残留日本人孤児は、中国に帰ることができる。しかし私たちがカンボジアに帰りたと思っても帰れません。行けば、殺される」。

続けてこうも言う。

「私たちは、厳しくても頑張っています。中国の残留孤児の場合は、日本でダメだったら、中国にもどることができる。私たちがダメだったらどこに行けばいいんですか？ 1つの道しかないんです。バックはできないんです」。

リー・ソクトンさんが言うように、残留孤児と難民の問題とでは明らかに違いがある。しかし、言葉の壁に関しては、彼も認めている。

インタビューの最後に、難民を支援する日本人ボランティアにどういうことを望むかを聞いてみた。

「日本の社会は大きくて、色々なグループがあちこちちでできています。しかしJVCが政府に関係あるのか、プライベートなものなのかということも分かりません。名前だけ分かりますが、内容は分からない。他の難民も同じだと思いますよ」。

(正木幹生)



▲ フィリピンバナナ反農薬キャンペーンに参加するレックさん(右側)



▼ 「日本語を勉強する時間がない」
リー・ソクトンさん



◀ ブンベットさんとボン・サックダーさんは家族が多いから大変だ

家族のためにがんばる

ボン・サックダーさんの場合

日本の生活はお金がかかるよ

上空を飛行機がとびかう大田区の都営住宅に、ボン・サックダーさん一家が住んでいる。子供5人をかかえる一家にとって2LDKは窮屈そうだ。

一家は、ラオスからタイの難民キャンプを経て日本にきた。日本に定住して6年が経ち、家族みんなの顔にも笑顔がみえる。

一家を支えるブンベットのさんは、家から自転車で10分くらいの工場で、旋盤関係の仕事をしている。この仕事は、大和の定住促進センターの紹介によるもので、今日まで同じ職場だ。今では、12人を監督するリーダーだ。しかし、この職場に入ったとき50人近くいた従業員は、半分ぐらいに減り、残業もできず、給料もあがらない。でも「どんなことでも我慢する。家族のために」とブンベットのさんは言う。妻のボンさんも内職してるが、こちらも不安定だ。

日本語に関しては、ブンベットのさんは、会社の人や友人と話すことによってだんだん覚えたそうだ。しかし子供にはかなわない。インタビューもボン・サックダーさん夫婦と長女(中2)を交えて行われたが、長女が最も日本語が上手だった。こちらでは、家族全体では日本語を話す、夫婦だけのときはラオス語だという。子供たちは、親の会話が理解できなくなってきている。

ブンベットのさんの会社の状態を除いて不安はあまりなさそうだ。近所づきあひも、団地の集まりがあれば呼びかけてくれるし、同じ定住難民とも、遊びにいたりきたりする。仕事、言語を除くと、子供の教育費が大変そうだ。なにしろ5人いるのだから。一番上の兄は、高校を卒業したらお父さん1人で仕事させるのはかわいそうだから就職するという。長女はまだ中2ではあるが、将来の夢は看護婦さんで、できれば高校ではなく、その関係の専門学校に行きたいと言った。

ブンベットのさんが「日本の生活はお金がかかる。少ない給料でもまだお金をとる(税金に引かれる)」と言う。このように思うのは、定住難民だけでなく、私たち日本人の大部分も同じであろう。

一般的に日本に一時滞在する難民は、アメリカ、カナダなどでの定住を希望する。一家の場合、妻は

「日本が好きだから日本に来た」と言う。夫は「どこでもいいから暮らしていきたい」と言い、「日本は仕事があるし、お金もある」と言う。アメリカ、カナダに住む友人によると、むこうでは仕事が少ないそうである。

このように家族の考え方の違いはほかにもある。お母さんと子供は日本に永住することを望んでいるが、お父さんはまだ考えられないようだ。

定住センターやJVCは難民のことをよく見ていない

インタビューの終りにフィ・ムンさんの事件^{*}について感想を聞くと、「子供がかわいそう」、「カンボジア人がこのようなことをしたので、私たちラオス人とかも同じようにみられてしまう。日本人は同じように考えちゃう」ということのほかに、定住促進センターやJVCなどは(難民の)生活のことをよくみてない」というのもあった。

ブンベットのさんの聞いた話によると、ある定住難民のお父さんとお母さんが毎日けんかしているの、8歳の子供がセンターなどに電話したところ、「センターを出た難民は関係ない」と答えられたそうだ。

リー・ソクトンさんのケースもボン・サックダーさんのケースにしても、定住して月日が経っているため、フィ・ムンさんのような事件が起こることはなさそうだ。これらのインタビューで耳に残った言葉は「時間」と「金」。この2つで困っているのは日本人も同じだ。しかし明らかに私たちと定住難民は異なる。たとえ日本の国籍が取れても、日本人とは異なる。この隔たりは彼らの問題というより、私たち日本人が変わらなければ解決しないことだ。

幸い、どちらの家も近所づき合いがあり、困ったときに助けてくれる人も持っている。それなりに日本社会に生きている。ただちょっと気になったのは、定住難民と一番接しているはずの救援団体の活動が案外難民に知られていないことである。難民関係に携わるものは、ここでもう一度自分たちの行っている活動を見直す必要があるのではないだろうか。

(正木)

^{*} 2月8日、神奈川県秦野市に定住したカンボジア難民(フィ・ムン)が妻子4人を殺害した事件。

タイの仲間たち

ノンチャン



- ① テリース・カオエッティ
- ② 1959年1月15日
- ③ アメリカ
- ④ 1985年10月
- ⑤ アメリカで5年間、タイで3年半難民のため

めに働く。

- ⑥ JVCがタイ・カンブチア国境のクメール難民への活動に関与していたからである。またJVCは組織が小さく、スタッフが関われることも大きいから。
- ⑦ ノンチャンの補助給食と栄養プログラムのプログラム・コーディネーター。私は時間のほとんどをキャンプ内の調整活動に費している。そのほか他団体との調整を計る会議や、JVCプロジェクトに関する話し合いにも出席する責任を負っている。
- ⑧ 私はJVCから非常に感銘を受け、この組織との一体感を感じている。JVCは小さな組織で全ての人が関与することができ、その考え方や関心にも耳を傾けてくれる。これはJVCの特長だと思う。私の見るところ唯一の弱点は、長期のスタッフを欠くことである。数多くの人々が来てJVCと経験を重ねることはよいが、JVCとしては、少なくとも何人かのスタッフが長期的に関わる努力をするよう働きかけるべきである。
- ⑨ 将来の計画に向かい、あまり遠くまであえて冒険するつもりはないが、これは人生の全てはうつりやすく、予想し難いからである。現在はというと、JVCの活動に慣れているとはまだいえないし、自分の仕事やともに働く人々を通して今だにたくさん学ぶことが残っている。外国で救援や開発の仕事をしている自分を見つめると、時折学校へ行くことや、さらに深く訓練を受けることについて考えるが、今後どうするかについては今のところ考えていない。
- ⑩ JVCの他のスタッフがプログラムを創造開発す

- ①名前
- ②生年月日
- ③出身地、国籍
- ④JVCに入った、あるいは活動に参加した日
- ⑤JVCに入る前は何をしていたのか
- ⑥なぜJVCにかかわったのか
- ⑦仕事の内容
- ⑧JVCについて感じていること、または提言
- ⑨これからどのようなことをしたいか
- ⑩ほかの国で働いているメンバーに伝えたいこと。

るために率先して活動することに深い感銘を受けた。私たちが触れ合う中で、わずかな経験やフラストレーションや喜びを分かちあうことを楽しんでいる。これ以上他のスタッフに言うことは何もないが、良い活動と、高い意欲をそのままに!!



- ① ブッパバン・サオケオ
- ② 1958年2月21日
- ③ タイ
- ④ 1986年3月1日
- ⑤ COEER(カトリックの救援団体)で農業プログラムのアシスタ

ント・コーディネーターとして3年間働く。それからパナニコムで難民のために英語を教えていた。

- ⑥ JVCには国境で働く機会があるし、その難民たちは私が前に活動していた場所の人たち以上に助けを必要としている。
- ⑦ アランヤプラテートのJVCオフィスとUNBROや他の救助団体との連絡役。必要な時にタイ語、英語、クメール語を相互訳する。キャンプへの訪問者の案内をしたり、日程のアレンジをする。ノンチャンとカオイダンに関する広報活動。
- ⑧ タイ人、日本人、アメリカ人の間に仕事に対する姿勢でいくつかの相違がある。例としてコミュニケーションの仕方、仕事の時の協力、考え方や文化の差である。提案として、すべての国の人がJVCで活動する前に今以上のオリエンテーションが必要である。またJVCはスタッフが一堂に会せるような活動を行って、アイデアを共有したり、お互いをもっと知りあえるようにすべきである。(この活動とはセミナーや、楽しみだけのためにスタッフが集まることでもある。)
- ⑨ 私自身のプランの責任を果たすことのほかに、保健教育プログラムの授業を手伝おうと思う。
- ⑩ 皆に考えてほしいのは、10万人以上もの人が同じキャンプ内に希望もなく、ベトナムの攻撃をただ待ち、そして逃げるという状態で居ることである。

(今回でこのシリーズは終り)

在日外国人と私たち

愛知県立大学教授 田 中 宏

まず最初に自分の氏素性をはっきりさせながらお話をしたいと思います。

私が大学を出てすぐについた仕事は、東京の駒込にあるアジア文化会館という、東南アジアから日本に來ている留学生と技術研修生の宿舎でした。その協会の職員を丸10年やって、それから大学の教師になりました。その10年の仕事がなければ、ここでこういうお話をすることもなかったと思います。大学では第二外国語の日本語を教える時間が一番多いのですが、「日本アジア関係史」とか、「在日外国人

の地位」において外国人をとりまくいろいろな問題について講義しています。

それでは10年間の留学生の仕事の中から、私が体験した象徴的なできごとを2、3お話ししたいと思います。その62年から72年というのは、北爆が始まりベトナム戦争が拡大したり、70年安保があったり世の中が騒然としていた時代です。俗にいう右傾化とか、過去の戦争に対する意識が変化し、アジアの人たちとの関係にも非常に微妙な問題が起きてきました。そういう背景の中に私はいたのです。

留学生の見た日本

伊藤博文の千円札

63年の11月に伊藤博文の千円札が突然出てきました。その時ある東南アジアの学生が、「田中さん、日本人というのは歴史というものをどう考えているのですか」と話しかけてきました。私も鈍感だから何のことかわからない。彼は「伊藤博文は最期はどうなった人なのですか」というのです。さすがの私もハッとしました。ご存知のように、伊藤博文は朝鮮を植民地化する上で最も重要な役割を果たした政治家で、1909年ハルビンで安重根に射殺された人です。

そしてその留学生は「日本にいる朝鮮人はどんな気持ちでお札を使うと思うのですか」というのです。さらに彼は続けています。「日本は非常に発言が自由な国だ。戦前と違って政府に反対しても刑務所に入れられることはない。それなのに誰もこの千円札を批判しないようだ。いつも政府を批判する人々も何もいわない。実は私たちが一番薄気味悪いのはそれです」と。私もそこまでいわれますと、日本人の端くれですから何か説明できないかと思うのですが、今日に至るまで答が出せないでいるのです。

82年に教科書問題がおこりましたが、その瞬間に思ったのは、私にとって教科書問題は千円札だったのだなというのが率直な感想です。

フランス語で話しかける学生

また別の留学生ですが、「日本の将来は問題だね」

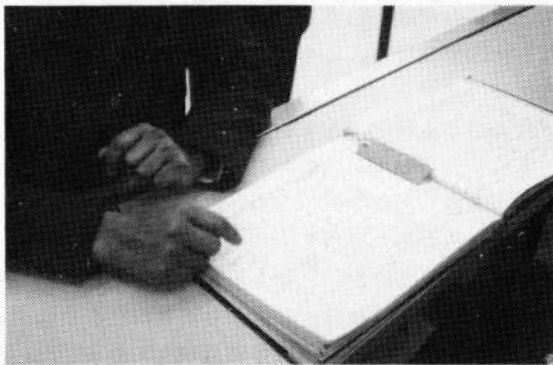
と言ってきました。何のことかと思ったら、東大の学生が彼をつかまえて、頻繁にフランス語で話しかけてくるというのです。ベトナム人にとってフランス語というのは、植民地支配の中でやむをえず使わざるを得なかった言葉なのです。十分に日本語で意志疎通ができるのに、それを使わず、一番不愉快なフランス語で話しかけてくる東大の学生はどういう教育を受けてきたのか、こういう人たちが日本の社会の中枢を担っていくとなると日本の将来はないというわけです。

日本の自画像については、私たちなりのものを持っていますが、アジア人から見るとまったく別な、虚をつかれたような姿が見えてくる。それがこの10年の発見の1つです。

生活保護をもらえば罪人

それから、これは1965年のできごとですが、シンガポールから來ていた私費留学生在が肝臓を患って入院したことがあります。医療費に困り、大学の先生が私たちのところに訪ねてみえたのです。4月ごろだったと思います。私たちにも揃えて渡すお金などありませんから、私が福祉事務所に相談に行ったのです。結果的に医療扶助がもらえることになり、私が福祉事務所にとびこんだ日から治療費は全部国が出すことになりました。

私としてはなかなかおつな解決をしたと悦に入っ



ていたんですが、3カ月ぐらいて、入管^{*}から在留期間の更新は不許可という通知がきたのです。本人は入院していましたから私がハガキを持って入管に行きました。何かの手違いじゃないかと。ところが入管法の24条には公共負担者排除条項といって、国や地方公共団体に財政負担をきたす外国人は日本から国外退去にするという条項があるのです。つまり彼は医療扶助を受けたことでこれに該当してしまったのです。

結局彼は不法在留となり、9月になって医者から飛行機に乗れるとの許しがでてから、自費出国許可を得るため、私は病み上がりの彼をつれて東京入管へ行きました。いったん法違反者となると自由に日本から出ることはできず、許可がいるのです。

それで手続きに1時間ほどかかり彼は部屋から出てきました。そして「田中さん、私今どういう目にあったと思いますか」というのです。彼は十指の指紋を取られ、写真も正面と左右から撮られました。その上口を開けろといわれ、歯の特徴もすべて調べあげられたのです。そういう手続きを受けなければ

闘う在日朝鮮・韓国人二世

外国人の持ちこむ相談に乗ったり、役所とかけあううちに、私のところにくる相談のケースが70年ごろから少しずつ変化してきました。最初に持ちこまれたのは、広島で被爆した韓国人が密入国してきた事件です。被爆者の中に朝鮮人がいるということを従来の日本の被爆者運動が放置してきたのですが、70年代に入るとそれにこだわるグループが出てきたのです。その人たちがこの事件に非常に関心を寄せ、何とかこの事件を通じて朝鮮人被爆者の問題をきちんとさせようとしたのです。広島は平和運動の原点といわれていますが、同じように被爆しても平和公園の中には朝鮮人の慰霊碑はありません。平和公園から川一つ隔てた向こうにボツンと建っている。被

出国の許可が降りないのです。彼は翌日羽田から発つことになったのですが、私が「明日、飛行機に乗るのは待たないか、いくら何でも私も耐えられない。弁護士と相談したいから」と彼にいったんですね。そしたら彼は「田中さんの厚意はありがたいけれど、私は1時間も早くこの国から離れたい。だから予定どおり飛行機に乗ります」といいました。

翌日私が見送りに行くと、「田中さんにはいろいろ世話になったけれど最後のお願ひがある」といって一枚の便せんを渡されました。『日本国法務大臣殿』という手紙にはこう書いてありました。

「私は勉強に来て途中で運悪く病気になるので、ずいぶん多くの人たちにいろいろな形でお世話になりました。このことについては本当に感謝しています。しかし日本の政府から援助を受けたというそれだけの理由で、罪人としてこういう形で日本から追放されることを、私は生涯忘れることはできません。必要な場合にはこの事実を公表する権利を留保したい」と。

彼が日本を離れてから私は法務省と厚生省に行きました。日本政府の1つである厚生省が適用した法について、もう1つの法務省がこのことをとらえて彼のビザを打ち切るのはいったいどうしたことなのかと聞いたのです。すると厚生省は厚生省、法務省は法務省、互いに他の役所のやることについては関知しないというのです。

他にもいろいろ経験しましたが、わざわざこの事件を申し上げたのは、日本における外国人の地位、処遇というのは、想像できないような状態に置かれているということを、しみじみ感じたからです。

爆者の中でも朝鮮人は差別されている。そこを市民運動がこだわっていたのです。密入国してきた孫さんという人をどうするかということにこだわる。それが私のところに廻ってきて、治療目的を達成させたいので力を貸してほしいといわれたのです。

これは結局裁判で争うことになり、福岡地裁から最高裁まで全部勝ってしまった。その人は日本に在留できることになり、治療も受けることができるようになりました。日本が36年間植民地支配をして、その間どういう形で日本に朝鮮人が渡ってきたのか、私も勉強しながらその運動体の人たちと一緒に裁判を組み立てていったのです。

76年になって持ちこまれたケースは今までとはま

※入国管理事務所

た違っていました。司法試験に合格した韓国人がいて、最高裁は日本に帰化しなければ弁護士になれないという。本人は韓国籍のまま弁護士になりたいというが、何か方法はないかと彼の先輩が相談にきたのです。要するに帰化して日本国民になればいいが、日本国民でなければだめだということです。

最高裁の担当課長は「今までの人は黙って帰化して弁護士になっているのに、あんたはなぜできないのか」というと、彼は「私は一生日本に帰化しないなんてことは考えていません。ただこれが欲しければ帰化しろという形で“踏み絵”のように使われることは、私には絶対に受け入れられません」とはっきり言ったのです。そして「私も弁護士になるために一生懸命勉強しました。どう考えても弁護士になるには日本国籍が必要だという法律上の制限もないし、理論的にもおかしい。それは合理性がないし、納得できません」ともいいました。

司法試験法にも弁護士法にも国籍による制限はないのに、弁護士になるための研修所に入るのには日本国籍が必要だということです。彼がその法的根拠を問いましたら、「20年前に最高裁の裁判官会議でそういう方針が確認された」というだけでした。結果的には最高裁が非を認め、彼は外国籍弁護士の第一

在日朝鮮・韓国人と難民条約

皆さんが関わっている難民問題というのは、私のような流れの中をずっと歩いてきた人間から見ると、日本社会にもものすごく大きな影響を与えたと思います。そのことについては以前に『トライアル・アンド・エラー』49号にも「インドシナ難民が在日外国人に与えたインパクト」というタイトルで書きました。

75年にインドシナ政変が起き、5月にポート・ピールルの第一船が千葉港に到着したのです。その時日本政府は非常に重要な決断を迫られました。今までは韓国からの亡命者などもすべて不法入国ということで処理してきましたから。しかし今回は上陸させないわけにはいかない。そこでご存知のような経緯をたどって、難民の問題を契機に日本の外国人政策は大幅な手直しをせざるを得なくなったのです。はじめは「一時上陸許可」だけだったのが、500人という枠を設けて「定住許可」も与えるようになった。外国の記者からはケタが違っているんじゃないかといわれたのですが、日本の場合あらかじめ枠を設けて外国人を受入れるという前例はなかったのです。

号となった。憲法の番人である最高裁が法的根拠もなしに国籍条項を入れて差別してきたのです。教科書には「法の下での平等」と書かれていますが、実際には十分な点検はできていないのですね。

それまでは当事者の側にも「どうせ朝鮮人だから」というあきらめの気持ちがあったのですが、このように若い人たちが自分でぶつかって自分の道を開いていくということが、70年ごろから積み上げられてきました。70年代には入社を取り消された在日韓国人青年が起こした日立就職差別裁判もありました。こうした流れの中で国籍差別が1つずつ取りはずされていったのです。この延長線上に指紋の問題が出てきたので、80年になって突然出てきたというわけではないのです。

しかしそういう一人一人はある意味では“さらし物”になる覚悟をもたねばならず、「通名」で逃げ隠れするわけにはいかなくなります。その積み重ねの中でずっと変わってきたのです。当初は留学生から始まって、別に私が意図したわけではないのですが、気づいてみると在日朝鮮・韓国人の問題にどんどん深入りしていくようになったというのが、二つ目にお話したかったことです。

そしてその数が3,000、5,000、10,000と徐々に広げられていったのはご存知のとおりです。

重要な外交イベントのたびに難民政策は変わってきた。そして79年に「国際人権規約」を批准するわけです。そのことによって、公団住宅、公営住宅、住宅金融公庫、国民金融公庫が、1980年外国人に開放されたのです。これは人権規約に加入したことに伴う国内措置です。「公」や「国民」という言葉は刃物みたいなものです。国民健康保険というのは外国人を入れてやらない健康保険、国民体育大会は



アジアから働きにやってくる女性たちの表情は明るい

外国人が出場できない体育大会、国民年金は外国人は入れない年金なんですね。「公」や「国民」という文字がつくと外国人はご法度ということでしたが、そのシステムが壊れ始めたのが難民を受け入れるようになってからだと考えていいと思います。

難民条約ができて30年たって、日本はようやく加入しました。この条約は非常に厳格なもので、加入するために日本は法律を改正せざるを得なかったわけですね。まず社会保障についてですが、それまでの日本の社会保障は、「日本に住所を有する日本国民」がその対象だったわけです。これは二種類の人を排除しています。一つは外に住んでいる日本人、そして日本にいる外国人、この両方を社会保障の対象からはずした。

それが難民条約には難民に対し、社会保障について「内国民待遇を保障する」という条項があるので、難民条約に加入しようとするこの部分が日本の法律と抵触する。そこで日本の法律を改正し、「日本に住所を有するすべての人」を対象にするようになった。社会保障というのは社会連帯、相互扶助がその理念になっているのですが、日本のものは外国人は仲間に入れてやらないという思想に支えられていました。外国人だから税金は七掛でいいとはいかないわけです。ビザを延長するときには納税証明書を必ず入管に出さなければならず、外国人の方がかえって税金はきっちり納めているんです。

人種差別には公的な介入を

最後に差別規制立法と人種差別撤廃条約について申し上げて終わりたいと思います。これは国連が採択した人権に関する条約の中でも最も批准国が多いもので、124カ国が加入しています。しかし日本はその中に入っていない。これに加入するためには、差別は道徳的な悪であり、極端な場合は処罰の対象としたり、公的介入により是正する立法措置をとらねばならない。日本にはこれがネックになっているようです。差別は人を殺すのと同じで、道徳的に許せないことであり、それをなくするためには公的介入をもすべきだ、というふうには、日本ではまだ考えられていないようです。外国人差別や、民族差別を規制する立法は日本には何もないのです。

南アフリカのアパルトヘイトについての制裁も同じ考え方でしょう。欧米では今までの経験から、差別というのは結局百万偏念仏を唱えてもなくならない、積極的な介入をしなければ差別解消には向かわ



インドシナ難民が日本の対外国人政策を変えさせた

日本はこのような社会なんです。黒船が来ると世の中が変わる。つまりインドシナ難民のおかげで、在日朝鮮・韓国人が公営住宅に入れ、児童手当が支給されるようになり、国民年金に加入できるようになったのです。これはついこの間の話です。ただちょっと残念なのは、難民条約に加入したことが日本社会の問題をどのように変えたか。そのインパクトがどうであったのかについては、研究者も報道機関もそういう認識に欠けていることです。

難民条約が持っている考え方は、そこに住んでいる人を対象にする、国籍は問わないことが常識なんですね。日本に住んでいる人がその資格を有することになります。国籍というのはそんなに重要なことではなく、そこに住んでいるかどうかということが大事なんです。お互いに税金を払い、軒を並べて暮らしているわけで、その人たちが共に協力して生きていくことを、どうやって実現するかということが、国際社会の共通の原理なんですね。

ない、というコンセンサスができていないのではないかと思います。国際社会が南アの人種差別に対しなぜあれほどまでに強硬なのか、おそらく日本では充分にはわかっていないと思います。日本にはそれぞれの国は主権を持ってやっているのだから、そんなにしなくていいのではないかと考える人もけっこういると思います。

人種差別に対し、国際社会は非常に厳しい見方をしています。それぞれの国内法において人種差別には刑罰を課すという制度を持っているのです。今後国際社会の中で生きていくには、こういうことも勉強し、人種差別についての日本の見方を考えなおしていかなければならないと思います。とにかく大變根の深い大きな問題ですが、それに取組んでいかなければならない立場に、私たちはいま立たされていると思います。

(2月28日 JVC学習会より)

パナニコム・キャンプの将来

天理教千葉教区難民救援の会 関根慶三

この1月14日から2月20日まで、タイのパナニコム難民キャンプにある日本語学校のボランティアとして、その活動の一端に触れる機会を得ました。またJVCのタイでの諸活動を見学したり、国境を難民の人々が歩いてきた道程を逆にたどることもできました。その時々いろいろな難民問題にかかわっている方々の話、情報を得て、今後の難民問題、特にJVCのパナニコム日本語学校の将来について私見を呈しまして、私の報告をしたいと思います。

日本語学校の現状

パナニコム難民キャンプは、国道をはさんでプロセシングセンターとトランジットセンターの2地区に分れている。難民は国境沿いのキャンプ（ホールディングセンター[※]）において各国政府のインタビューを受け、第三国への定住許可がおりると、パナニコムのプロセシングセンターに入って来る。ここでは各国のボラ（民間救援団体）から文化、言語教育を受け、第三国への出国の日程が決まるとトランジットセンターに移るといふしくみになっている。

日本語学校はプロセシングセンター側にあるが、現在この区別は明確ではなく、特にベトナム人はシキュー、ソククラのキャンプが閉鎖になってからは直接パナニコムに移送されてくるようになった。そのためトランジットセンターの中にセクションCというベトナム人居住区が設けられ、タイ内務省(MOI)の厳しい監視のもと（スパイ防止のため）、金網に囲まれた中で生活している。またセクションCには、脱走兵を収容するアランセクションという特別な一地区もある。

キャンプ内には20余のボラが入り、食料、水等生活必需品の配給、言語文化教育、病院、テクニカルスクール、伝統医療、芸能、クラフト等さまざまなプログラムを持って活動している。

日本語学校のプロジェクト内容については当誌巻末のとおりですが、私の滞在中にSCF (Save The Children Foundation)の小学校に通っている子供たちを対象に、ラオス小学校の中に教室を設け、サイエンスプログラムが始められた。サイエンスといっても、最も基本的な火・水・風等の成り立ちなど

を実験（ビーカーやアルコールランプの購入は大変だそうです）や映画を通して子供たちに教えていくのですが、子供たちの関心の大きさに驚かされました。子供たちには母国語で教えるため多くの難民ティーチャーが採用され、彼らのための勉強会（ティーチャートレーニング）等、日本語学校の内容もバラエティに富んだものになってきました。

日本語学校の役割

私は当初「日本語学校」と聞いて、日本語を教える学校、それがすべてと考えてパナニコムに入りました。もちろん日本語は難民にとっての異文化、日本を理解する上で必要不可欠の条件です。彼らがこの世界の中で難解といわれている言語をどの程度理解するかによって、日本における適応力も変わってくるわけで、日本語教育はもちろんメインプログラムであることに変わりはありません。

しかし難民キャンプに通ううち、このキャンプが1つの国際社会であるということに気づきました。人種的にも難民の他、タイ人はもちろん、20以上のボラが入っているわけですから多くの国の人間が存在します。そしてここを管理するタイ内務省(MOI)と救援団体を代表するUNHCR。これらの団体とそれを構成する人間が、統一されたイデオロギーもなく存在するのですから、お互いのコミュニケーションが大切なのは言うまでもありません。

私は今回イサーン（タイ東北部）をまわらせてもらい、その貧困と土地の疲弊を見ました。タイ人にとってはよそ者が自分の国に勝手に入って来て、仕事もせず、食料を与えられ、その上外国語や技術をただで習っているという状況はがまんがならないということがよくわかりました。タイ人自身が飢えているのですから。ここでタイ国内の諸問題について書く余裕はありませんが、MOIがタイ人の心情を代表して諸々の行動を行っていることは否めない事実であります。キャンプ内のタイ人スタッフの中にも、あからさまに難民に対する嫌悪感を表現する者もいます。数年前のように、食うや食わずの瀕死の状態です。キャンプにたどりつくということは現在はありません。国連のいうように彼らは経済難民です。彼ら



パナニコム・キャンプの人口

1月22日現在

	プロセッシング センター	トランジット センター
クメール人	1,847	1,501
ラオス人	1,177	1,405
山岳民族	3,220	252
ベトナム人	—	4,117
小計	6,244	7,275
合計	13,519	

の多くは、自分の国にいるより第三国へ行った方がよい暮らしができると思ったから出て来たのです。かといって、難民の人権を無視していいはずはなく、MOIと難民の間で右に揺れ、左に揺れるのがボラグであります。

今キャンプで一番大きな問題は、“無償労働”です。今年に入りMOIは週に何日か、難民に強制的に道路清掃、ゴミ収集作業等の労働を課すようになりました。もちろん無給です。すると各ボラグになくはない難民ワーカーがとられてしまい、ボラグによっては（病院など）プログラム進行上、大きな支障をきたすようにもなり、ボラグミーティングの席上問題になりました。

UNHCRの仲介で妥協案が出されましたが、基本的にMOIの難民に対する姿勢が変わりません。本年1月からセクションCでは難民への金銭の支払いが禁じられ、4月からはキャンプ内全てで同様の措置がとられるようです。無給となればワーカーも働く意欲をなくしてしまい、再びキャンプ内での大きな問題となってくるでしょう。

その他キャンプ内での問題は多岐に渡っており、管理するMOI、救援者としてのUNHCR、各ボラグ、そして難民と、小さなキャンプ内でのバランスとりが大変大きな仕事であると感じました。

将来の展望

今回はパナニコムのほか、国境地域のいくつかのキャンプを訪ねることができ、とてもよかったと思います。これからのパナニコムやインドシナ情勢を占う情報の裏付けができたからです。

私は会う人ごとに「これからのパナニコムはどうなるでしょうか」という質問を發しました。今年中

にオーストラリアやカナダのボラグが活動を終える予定です。セクションCでもいくつかの教育プログラムがなくなるでしょう。昨年3カ所の大きなキャンプ（シキュー、ソククラ、ウボン）の閉鎖に続き、カオイダンも名目上閉じられました。

タイの新聞によれば、ハノイ政府はシアヌークにヘン・サムリン政権と三派連合政府が一緒にテーブルに着き、カンプチア和平とベトナム軍撤退について話し合おうという申し出がなされたそうです。またナボーなどのラオス難民キャンプが本年中に閉鎖されるだろうとか、インドシナ情勢が解決の方向に向かっていることを示唆していました。

このような情勢から、各国はタイ政府の難民問題終結の意志をくみとり、最後のそして大量の受け入れを決定しました。日本政府も足並みを揃え、この3月にインタビュー団を送りました。したがってインドシナ難民に関する限り、その歴史は刻一刻と閉じられる方向に向かっていることは間違いなく、このような流れの中でパナニコムは今年1年最後の賑わいを見せるでしょう。パナニコム・キャンプ自体は将来的にセクションCが拡大されて、ベトナム人キャンプのような存在になるでしょう。それとともに、日本語学校はここ1～2年でその存在意義を急速に薄めていくことになると思います。このような中で、“いつ日本語学校を閉めるか”というテーマをかかえながらコーディネーターは難民とかかわっていかなくてはなりません。

この4月以降のパナニコムのニュースタッフに励ましの言葉を贈って、私の拙ない報告を閉じたいと思います。ニュースタッフ頑張れ！

*クメール人-カオイダン・キャンプ
ラオス人-バン・ナボー・キャンプ
山岳民族-バン・ピナイ・キャンプ

MY DEAR FRIEND

海外援助って何だろう

仲田奈々子

1年4カ月間は長かったようでもあり短かったような気もする。大学を卒業したばかりで、実際に栄養士として働いたこともなく、何もわからないまま“勉強”のつもりでタイに発った。

私は何をしてきたのだろうか。日常の仕事は、周りの人たちの助け、協力でなんとかこなしてきた感じだ。学ぶことばかりで終わってしまった。月並みではあるが、この1年あまりは、私にとってとても良い経験になった。“何が良かったのか？”数えあげたらきりがないが、大きく3つあげてみたい。

まず今まで自分の知らなかった世界の一部を見ることができたことである。知識としてだけの第三世界、また難民キャンプという特殊な世界を目のあたりにし、その問題を少なからず肌で感じた。

次にクメール人をはじめいろんな国の人たちに出会ったこと。いろいろな考え方、文化、生活を知ることができたことである。

そして、自分の力のなさ、勉強の不足を改めて思い知らされたことである。日本とキャンプの栄養の問題は違うということもあるが、それにしても……。栄養のことに限らず、社会のことも含めて、まだまだ勉強しなければいけないことは山ほどもある。

これらを通して、それまで持っていた価値観とか社会規範というものに疑問を持つようになった。まだ自分なりの価値観というものをつかめたわけではなく、模索している状態だ。が、何の疑いも持たずにいたことに、少しでも疑いを持つようになったということだけでも大きな収穫だと思う。

話は変わるが。

キャンプは国連の援助によって運営されている。彼ら難民たちは、その援助なしに生活できない。また彼らにはその地で自立していくことが許されていない。彼らは援助に頼るしかない。その援助が、自立という、本来人間のあるべき姿から彼らを遠ざけてしまう。物をもらうことが当たり前になってしまう。

“与える側”と、“もらう側”の関係。自分の意志

補助給食をもらうため、妊娠のチェックを受ける



とは関係なく、“上下関係”のようになってしまう。自分は同じ立場、対等に物を言っているつもりでも、相手はそう取ってはくれない。憤りはつるばかりだった。私自身はその関係を最後まで崩すことができなかった。彼らにとって私たちはいつもお客様なのだ。上の立場の人なのだ。もてなされるのが当たり前となっていく。そうされることで、戸惑いはしても悪い気はしない。そして、いつのまにか、上の立場で物を言ってしまう。恐しいと思った。それに慣れてしまい、そうされることに何も感じなくなっていく自分がこわかった。ただ先進国といわれる日本に生まれたというだけで、こんな待遇を受けていいのだろうか。技術的なことももちろんだが、そういう人間的なことで自分の限界を感じてしまった。

海外援助、海外協力って何だろう。お金、技術だけではないことは皆わかっている。単なる“お恵み”で終わってはいけないことも十分にわかっている。頭ではわかっているつもりでも、実際には北側の立場での援助、その立場からの協力にしかすぎないのではないだろうか。自己満足なのだろうか。自分が直接関わっていたことだが、自分のやっていることに自信が持てなかった。わからないことが多すぎる。矛盾だらけだ。わからないからこそ、わかりたいと思う。これからも何らかの形で関わっていきたい。

(仲田さんは1985.10～1986.12までノンチャンの難民村で栄養士として働いていました。)



『日替らない定食』

ソマリアの日々——③

五十嵐裕昌

「また、日替わらない定食か」と、日本人スタッフの嘆き声が聞こえる。ルークには、スパゲッティかピラフの様な物しかない。ルークでの楽しみは食うしかないのに、毎日同じものしかないのである。しかも、これらの食べ物は全て油でべとべとで、見るからにまずそうな、実際、日本人の口には余り合わない代物である。だから食事の時間には、異様な雰囲気包まれる。最初は「まずい」だの、「食えねえ」などと言う声。その内に皆、怒りを通り超して、不気味な微笑を浮かべるのである。「うっ、うまい」だの、「これこそ究極のスパゲッティだ」などと不可解な発言。

食べ物の恨みは不可解である。

ソマリアの贅沢は、ラクダの肉である。これが硬い。日本人のあごでは、噛み砕くのが一苦労だ。時々、結婚式や誕生日などのパーティを催す時は、ソマリア人たちと4、5人で一つの皿を囲む。山盛りにされたスパゲッティの上にてっかい肉の塊。日本人が一塊を食うのに悪戦苦闘している間に、ソマリア人は残り大部分を平らげてしまう。

「アディガ、マハ!!」(お前、何やねん)と、怒ってみても、もう皿の上には何も無い。いつもそうである。そして、食った後の脱力感。

食べ物の恨みは切ないのである。

日本人スタッフの間で禁句がある。

ルークは夏になると(年中夏なのだが)、日中40度を超える。すると冷たい飲み物が欲しくなる。そんな時、皆んなでこの言葉を囁き合うのである。

「かき氷」「アイスクリーム」……………。

この言葉を聞くと涙が出るほど激しい怒りがこみあげてくる。ルークには電気がない。つまりルークには冷蔵庫がない。したがって「かき氷」などあるはずはないし、ルークの人は「アイスクリーム」など見た事もないのである。毎日、暑い中に居るとビールなどという物も欲しくなるのだが、あるわけではない。そんな時、皆でこの言葉を囁き合い、励まし合うのである。このやり場のない悲しみ。

食べ物の恨みは苦しいのである。

ソマリアの人たちは回教徒である。だから彼らは年に一度、ラマダン(断食)を行うのである。断食というから何も食わないのかと思ったら、とんでもない。彼らのいう断食は太陽の昇っている間は、口の中に物を入れてはいけないというものである。だから昼間は何も食わない彼らも、夜になると、ちゃんと一日分食っているのである。それでいて昼間に仕事をしようとする、「今、断食中で力が出ない」などといってさぼるのである。初めの頃は「ああ、腹が減ってるんだな、なんて宗教心の強い奴等なんだ」と思ってたが、そうじゃない。実は夜明け前にたらふく食い過ぎて動けないだけの事である。

「アディガ、マハ」(お前ら、何やってんねん)と怒るのだが、全然気にする様子もなく、突っ立っている彼らである。

俺も断食に挑戦してみたのであるが、彼らの断食のシステムを知らず、完全断食をしたためにあえなく3日でダウンした。ソマリア人たちは、皆で俺を騙していたのである。

「アディガ、マハ」(お前ら、ええ加減にせえよ)と、にやにや笑っているソマリア人スタッフに怒りをぶつけるが「ハハハ…、ざまあみろ」とバカにされた。

この食べ物の恨みは深いのである。

全く食う事が最大の楽しみなのに、全然楽しくない。全く。

そんな時、沈む夕陽に向かって叫ぶのである。

「日替わらない定食のバカヤロウ!」

「かき氷なんて嫌いだ!」などと。

そうして、ルークの一日は終わっていくのである。





◀井戸水がでたよ

JVC情報

夏はタイで井戸を掘ろう

JVCワークキャンプ'87

この夏、あなたの休暇を利用してワークキャンプに参加しませんか。健康な身体があれば、特別技術を持っていなくてもOKです。

東北タイは今年も深刻な水不足に悩んでいます。遠くから運んできた水を買うために全財産を注ぎ込んでしまっ、借金の増えた家族が増加しているという、日本では考えられないようなことが起っています。

JVCは1982年から4年間に80余本の井戸を東北タイ5県に掘りました。衛生的見地から、閉じてポンプを設置したのですが、部品の破損や磨滅による故障で、使用不能な井戸が増えてきています。大半が故障してしまっていると言っても言いすぎではありません。しかし、鋳物のポンプは値段が高く、修理部品の入手・修理とも農民には難しすぎるので、そのまま放置されています。蓋を取って使用している場合もありますが、不特定多数の人たちが、さまざまなバケツを入れたりするのは衛生的には好ましくありません。

最後の10基ぐらいにはバングラディッシュで開発され、タイのATA(適性技術協会)が改良したローイングポンプを使いましたが、これはあまり故障もな

く、簡単な構造で、農民にも手じかにある材料で直せるなど、いろいろなポンプの中で一番適性なポンプと言えます。

そこで、この夏モラロジーMIRCから予算をいただき、すべての井戸の清掃を行い、全部の井戸のポンプをローイングポンプに付け替えることにしました。修理の方法は1県で2カ所ぐらい選び、近隣の井戸のある村の農民を集めてデモンストレーションをし、直し方を学んでもらって、自分の村の井戸の修理は自分たちでやってもらいます。

以前井戸掘りをしており、今はJVCバンコクにいるカモン・ミンムアンが責任者になり、技術的なことではATAのスタッフがいつでもどこでも協力してくれるそうです。

おいしい空気とタイ料理を満喫しながら自分の目でタイの農村を見、自分の心でタイの農民と交流してみませんか。

期間：7月中旬～9月中旬(日本での事前研修・1週間)

募集人員：3名(又は1カ月ずつ6名)できれば男子学生

仕事：約80本の井戸ポンプ修理

費用：18万円(日本での研修費も含む)

場所：東北タイ5県

(担当・岩崎)

Oh! BEIRUT チャリティ・コンサート

カーリド・アル＝ハベル

今だ戦火の絶えることのないレバノンのベイルートで、戦う人々の苦しみ、悲しみ、怒り、希望を歌いつづけて来たシンガー・ソングライター、カーリド・アル＝ハベルが日本にやって来ます。日本で市民レベルで連帯運動をつづけてきた人たちが招待し、コンサートを企画しました。

中東、とりわけレバノンで現在起こっていることは、表面上平和で豊かで遠く離れた日本に住む私たちには、縁遠くなじみにくいものかも知れません。しかし、複雑でわかりづらい中東の問題を考えることは、現代の世界のしくみや歴史を理解するためには不可欠のものです。

今回、現地の苛酷な状況の中で暮らす人々の声を直接に日本の民衆に伝えるカーリドに接することは、

この意味でよい機会となるでしょう。アラブ民族音楽の豊かな伝統の中に織りこまれた独特のリズムとメロディーが表現する、様々な人々の心の動きと想いの流れ。カーリドはそれらを巧みに駆使しつつ、新しい時代の息吹と熱くほとばしる激情を一連の歌の中に息づかせることに成功しました。カーリドの音楽を通じて多くの方がアラブの心に触れ、中東の問題を少しでも身近に考えることのきっかけになればと思います。

日時：1987年6月1日(月) 18時30分

場所：よみうりホール(有楽町・そごうデパート7階)

入場料：2,500円(前売り) 3,000円(当日)

連絡先：Oh! BEIRUT チャリティーコンサート

委員会・東京

東京都新宿区西早稲田2-3-18-31

日本基督教団内 Tel 03-205-1429

JVCプロジェクト

1987年3月25日 現在

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
東京本部	<p>渉外、事業計画、資金調達、ボランティア調整、会計、総務、情報収集および広報等。</p> <p>機関誌『トライアル・アンド・エラー』発行。</p> <p>JVC説明会—毎月第1月曜日 午後6時～9時 第3土曜日 午後1時～4時 学習会 第4月曜日 午後6時～9時</p>	全国社会福祉協議会	<p>岩崎駿介(代表) 星野昌子(事務局長) 柴田久史、佐々木志保、 加納 妙、前川昌代、 佐久間典子、古西 勇、 鶴田三芳、岩崎美佐子、 富安光子、村田恵子 他</p>
日本国内	<p>●日本語家庭教師 日本語家庭教師だけの活動から生活相談、医療、法律相談など多岐にわたるようになった。定住難民との関係も、援助する側とされる側という関係ではなく、ともに生きる関係としてとらえ直すことから、プロジェクト名を変更し、“ボランティア”という名称を廃止する。新しい名前を募集している。 また現在のスタッフの後任も募集中。</p> <p>●東金農場 農業研修と可能な限りの自給自足をめざす。 田んぼ(60a)は田おこしが終り、畑は30aのうち5aを耕作している。 地域との交流をはかるため農業研究会を始めた。</p>	<p>ジャパン・タイムズ 神奈川県福祉部 国際婦人福祉協会</p>	<p>森山久寿子、 他約60人</p> <p>井本勝幸</p>
エチオピア (ウォロ州)	<p>●総合的復興促進 マーシャに深井戸を2基掘る作業が、現地政府の機関の協力のもとに開始された。料理、家庭菜園の指導を含んだ栄養教室も、低体重児を持つ家庭を中心に行われている。 種子銀行は来季に向かって準備中。モデル農場ではアグロフォレストリー用の樹種の育成実験と現地農法での農業を実施している。</p> <p>●植林 ツルテ川上流に100haの水土保全用植林地が認められ、これと家庭植林用のために苗木生産中。</p> <p>●農業 先月にひきつづき、種子銀行では現地での種子準備をしている。モデル農場ではアグロフォレストリー、有機農業、牧草実験等を行っている。</p> <p>●保健・栄養 第1回目の母子教室が終了。2回目は対象者を代えて始める予定。家庭訪問による家庭菜園の奨励も行っている。</p> <p>●給水 マーシャ村クリニック横の深井戸が完成した。</p>	<p>CRDA, 西本願寺, チャリティ・カレンダー, チャリティ・サイクル, メリノール修道士会, 全老連, バンド・エイド, 日本漫画家協会</p>	<p>内山田 康、伊藤達男、 伊藤幸子、久田信一郎、 有本敦子、 イエットベルク、ソロモン、 パレタ、フェテルワルク、 ダニエル</p>

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
ソマリア マガネイ・キャンプ (ゲドー郡)	<p>●農業による自立促進/定住 今年からディーゼル代は、UNIT1, 旧UNIT2, UNIT3が全額, 新UNIT2, UNIT4が半額を農民が負担することになった。 主要水路(全長1.2km)が高すぎるためよく決壊するので、7日にUNIT4の農民が低くする工事を行う。UNIT5の建設は農民候補者と日雇い労働者が共同で作業を進めている。 定住計画は13軒の家が農場の近くに建てられたが、農民のJVCに対する依存心が強すぎるためこの計画は中止した。</p> <p>●コミュニティ・サービス/収入プロジェクト 1月にキャンプの中を調査し、職を通じ自分たちの生活を向上させる意志のある人々を探す。パン屋、かじ屋、帽子屋が始まる予定。たき木を大幅に節約できるクッキング・ストーブ作りもデモンストレーションから始める。 キャンプ内で料理教室、衛生教育、少年のためのレクリエーションを企画中。</p>	UNHCR R.I. ジャパン 創価学会文化・平和運動事務局 ジャパン・タイムズ	嶋 紀晶, シアッド 萩ノ迫善六, 樫田秀樹, 船川秀夫, マーシャ石井, モハメッド, ラシッド, ハジ, アオキ, アブディ ・ジョフ, フセイン, ア ハメッド, ハッサン
ジャボレ・キャンプ (ヒラン郡)	<p>●医療・保健/補助給食 保健員、助産婦の養成も第2期に入り、キャンプ内へくいでいく形で、人々の健康管理、衛生環境向上を強化。</p> <p>●植林 4月から始まる雨季に備えて、人々に配る苗を準備している。</p> <p>●家庭菜園 今シーズン最後の作物(トマト、ピーマン)が人々の口へ。</p> <p>●収入プロジェクト パン屋はオープンを修理しているが、5台のドンキーカートは毎日順調に水を運んでいる。</p> <p>●教育 IITT(ソマリア政府の教育機関)と教育内容について交渉中。</p>	朝日新聞厚生文化事業団 モラロジーMIRC 仏国土をつくろう会 砂漠に種をまく人の会	浜野敏子, 米澤 聡, 庄司 美, シュクリ, ハッサン, アブディ, シュイク・アブディ
カンブチア (ブノンベン カンダール省 プレイベン省 スバイリエン省)	<p>●カンブチアの人々への総合的人道援助 建築中の救援のためのワークショップ/技術学校は4月初めにセレモニーを予定している。 11月中にユニセフ・ブノンベンと補助栄養給食プログラムにおける協力を合意。87年度には人材(医療・栄養)を派遣する予定。 ブノンベン市に芝刈り機、ゴミ箱用の資材を提供。 OXFAMと共同で井戸掘りも行っている。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 救援のためのワークショップ/技術学校 2月中に建築完了。4月2-9日開校予定。 各支援団体の訪問を申請中。 2. 井戸掘り/給水 プレイベン州で継続中(OXFAMと共同) 3. ブレック・ピノウ孤児院援助 男子用宿舎, 手工芸室, 浴室の補修・建設完成。 トンレサップ川からの水浄化システムを計画。 4. 補助栄養給食 1987年度からUNICEFと共同で栄養不良の子どもたちを対象に行う。人材も派遣する予定。 5. ブノンベン市公衆衛生局への協力 同局のクリーンナップ・キャンペーンに協力し、芝刈り機、ゴミ箱用の資材を提供した。 6. クメール古典舞踊学校支援 今年度計画のため申請待ち。 	日本青年会議所 関東地区協議会 平和基金, 全国 全国老人クラブ 連合会, 創価学会文化平 和運動事務局, モラロジーMIRC, 立正佼成会, 自動車労連, 庭野平和財団	熊岡路矢, 箕田健一 蓑田玲子

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
タイ バンコク事務所	渉外、事業計画、資金調達、ボランティア調整、会計、総務、情報収集および広報、バザー、古本のセール。季刊『ニュース・レター』（英語・タイ語）発行。	全国社会福祉協議会	ボンビモン・チャイブーン、カモン・ミンムアン、クリッサダ・タウイバサ 他約10人
カオイダン (カンブチア 難民キャンプ)	●西崎憲司記念技術学校 3月1日、第一回目のイリーガル（不法入国者）のSite Bへの移送が行われた。今前半はこのようなイリーガルの対応のため、キャンプ内が緊張した。3月20日、今年度最初の学期を終了。クメール人ワーカーたちとの数回にわたる協議の結果、次学期より授業編成を組み替え、より効果的かつ小回りのきく内容とすることとなり、現在具体的な準備日程を作成中。	UNHCR R.I. ジャパン	矢野和貴、谷山博史、ソムヨット・ラタナタム、パイトゥーン・チマチュイ
国境のサイト2、 ノンチャン (カンブチア 難民村)	●補助給食 栄養失調の子供、3歳以下の幼児、妊産婦、授乳期の母親への補助給食と母親への栄養、保健教育を行っている。 4月25日からの新住民登録に向けてカードの作成を開始した。	WFP/UNBRO	テリース、ブーム、トンチャイ、スリベン、ソムボン、スビチャ、北代るり、ソムサック、カレン、ナラボントンバイ、ヌラ
バナニコム (第三国定住待ち 難民一次収容施設)	●文化オリエンテーション ・日本定住予定者 ①日本語学習の基礎（読み、書き、聞き取り） ②日本語の日常会話の習得 ③日本に関する概略的な理解を促す ④渡航に必要な事柄への理解と実習 ・日本以外の国への定住予定者に手続きの理解を深める。 ●子供レクリエーション・プログラム 一般生活常識を通して自然科学の基礎を教える。	天理教千葉	石原淑子、落合正幸、アナン・ブッタミリンパティ、ウィバ・ロンブル
地域開発 (バンコク市内の スラム地区)	●奨学金援助 スラム在住児童が小学校（6年間）を卒業できるよう援助している。本年度の対象者は10のスラムで16校250人。 ●クロントイ図書館 クロントイスラム住民の就学前児童から成人までを対象としている。12区における新図書館建設のため、NHA（住宅公社）と交渉中。 ●移動図書 ラブレー、ナンシーのスラムで子供向け図書を中心に回覧。 ●移動学習センター（プラティープ財団、FFSC、JSRCとの共同プロジェクト） 9のスラムで学習の機会のない子供たちのため人形劇などで教育を行っている。 ●再定住 ラッカバン地区において再定住したバンコク市内のスラムの人たちへの資材援助（長期資金貸与方式）。	モラロジーMIRC、 NTV、JOFIC、 庭野平和財団 京都国際青年委員会	ヴァラナート・チェンクン、サムルアイ・ジョンヨークラン、アルニー・スニットムンヴァイ、リーラ・クンナロン、スワン・リンサムバン、コメン・スンサマラヤ
人材派遣プロジェクト			
フィリピン (PFAC, バラワン島)	●国際移民委員会(ICM)一第三国定住手続きにともなう医療業務及びキャンプ内でのプライマリ・ヘルスケア。	城西病院	青井千恵

JVCの活動とその目的に御理解を

▶**JVCとは**— Japan International Volunteer Center は1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形ができました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金等によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行います。

▶**JVCの会員募集について**— 会員は、総会に出席し、JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができます。また正会員には自動的に、機関誌(T/E)をお送りいたします。会員の種別と年会費は以下の通りです。

・正会員 (一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円
 団体会員 30,000円 学生会員 3,000円
 ・賛助会員 金品による支援(金額は自由です。)

▶**機関誌『Trial & Error』のみの購読について**

・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
 ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶**送金の方法**— 下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

①会員：東京5-48365 加入者名— JVC 会員係
 ②T/E：東京3-54186 加入者名— JVC 東京事務所
 (住所、氏名、購読開始月をお書き添下さい。)

▶**みなさまの募金を支えるJVCの活動**— 救援活動をより充実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

- A. **アフリカ難民救援募金** (3月小計 49,276円) アフリカの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われます。
- B. **インドシナ難民救援募金** (3月小計 26,500円) タイ国内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。
- C. **カンブチア募金** (3月小計 79,036円) カンブチア国内の復興のために使われます。
- D. **スラム募金** (3月小計 128,000円) バンコクのクロントイ・スラム内の図書館の運営およびスラム立退き者のための建築資材購入費に使われます。
- E. **テッグ・スラム奨学金・基金** (3月小計 702,970円) バンコク市内のスラムの子供達が学校へ通う費用を援助します。
- F. **日本語家庭教師募金** (3月小計 6,005円) 定住難民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。
- G. **医療募金** (3月小計 10,000円) 緊急事態が発生した場合、速やかに医師を派遣したり、医薬品などの緊急救援物資を輸送するために使われます。
- H. **ボランティア募金** (3月小計 5,000円) 現場で活動を続けるボランティアの健康管理費にあてられます。
- I. **JVC 運営経費募金** (3月小計 126,154円) 現場を支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
- J. **無指定募金** (3月小計 509,265円)

▶**送金の方法**— 下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。
 東京9-27495 (募金種目名をご記入下さい。)
 加入者名— JVC 東京事務所

編集後記

▶中国帰国者の子どもたちに、日本語の授業をしている教師たちの勉強会に参加する機会があった。中国帰国者のことは以前から気になっていたのだが、今まで積極的に関わったことはなかった。難民は難民、中国帰国者は中国帰国者と、関係者同士の交流もほとんどなく、これでは厚生省と法務省の行き違いを笑えない。もちろんそれぞれの立場は違う。しかし日本語の習得に悩み、差別と戦いながら生きているのは同じだ。「難民はいいよ、国から予算をいっぱいもらって」「中国帰国者には高校入試に特別な配慮があるのに、どうして難民にはないの」お互いに張り合うなんてばかばかしい。私たちまでカラに閉じこもることはない。



昭和62年4月20日発行(毎月20日発行)

編集人 前川 昌代
 発行人 星野 昌子
 発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC)東京事務所
 〒113 東京都文京区湯島3-1-4 会田ビル5階
 ☎03(834)2388 Telex:2323187 JVCHQ J

バンコク事務所 JVC THAILAND
 29/3 Soi Saengchan, Sukhumvit40,
 Rama 4 Road, Bangkok 10110.
 ☎391-1117
 Telex:87032 COMSERV TH

ソマリア事務所 JVC SOMALIA
 c/o UNHCR P.O. Box 2925
 Mogadishu,
 Telex:794 HICOMREF SM

エチオピア JVC ETHIOPIA
 事務所 P.O. Box 6941 Addis Ababa

カンブチア JVC KAMPUCHEA
 事務所 203 Monorom Hotel Phnom Penh
 Letter :c/o ICRC, P.O. Box 11-1492
 Bangkok.

印刷所 (株)ベスト・プリンティング

*本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。

定価 送料共 300円